

作品名	土着する暮らしと循環のかたち 小屋 × 自然素材	作品番号	1/5
校名	富山大学 芸術文化学部		
氏名	杉田 茉優		

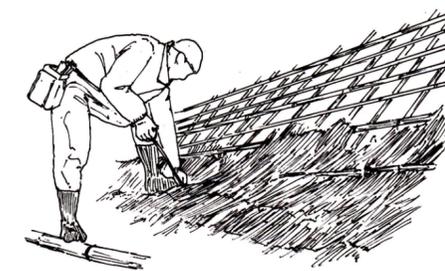
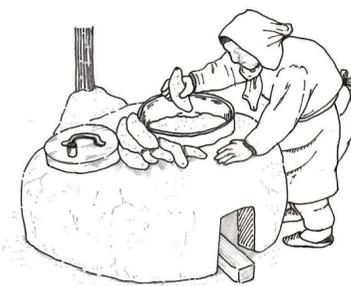
土着する暮らしと循環のかたち

—小屋 × 自然素材—



00
はじめに

“手を動かしてつくる”ことはわたしたちの暮らしにあり、ひとは土や木々、水、藁、竹、石…さまざまな自然に触れながら自然を知り、理解し、自然を共生するために暮らしの知恵を深めた。しかし現代では技術の進歩により「つくる」ことは効率よく大量生産することが重視され、機械により細分化・分業化されている。手を動かしながらつくるものが減少し、できあがったもので溢れかえる現代のなかで、私たちはそのものがどういう素材からどうやってつくられたのかをどこまで理解できているだろうか。便利なものが簡単に手に入る時代だからこそ、自分の手で素材に触れながら、一からものをつくる、その大変さや難しさを体感しながらも素材に触れながらその本質を知る楽しさ、一からつくりあげる達成感を体験することが必要だと考える。



土を触る、土を知る

—かまどづくりをとおして—



土を採る

土を練る

土台をつくる

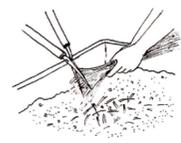
下地をつくる

中塗りをする

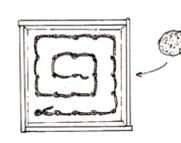


土嚢袋とスコップを持ち、山の崖になったところから土を採集する。土は黄みの強い粘土質のもの。

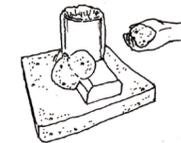
採集場所 - 輪島市 三井町 畑屋



はじめて手から土の感触を知る機会となった土練り。5cm程度に薬をカットし、土と砂、薬を水を加えながら練っていく。



土台の厚さが2cmになるように型枠を作成。底板には土が付きやすいように1cmほど頭がでるように釘を打ち、シュロ縄をまく。土を団子状にし、空気をぬくように投げつける。



土台が乾燥したら型枠をはずし、かまどの下地をつくっていく。かまどの釜口と焚口は塩ビパイプとスタイロフォームをつかう。下地は約1か月乾燥させる。



中塗りはひび割れや収縮部分を修復しながら、鏝でかたちを整えていく。

土の構法を学ぶ

—版築ブロックの試作—



土を採る

土づくり

土を搗き固める

型枠を外す

風化する表層

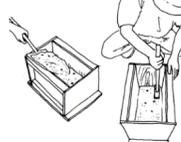


版築につかう土は粘土質でない、さばさばした赤土を採集。今回は土以外にも、川で砂利を採集する。

採集場所 - 輪島市 三井町 洲衝



採ってきた土と砂はふるいにかけて大きい石や落ち葉を取り除く。土、砂、川砂利を水を加えながら混ぜていく。



300×400×200 mmの型枠に一層75mmの高さまで土をいれ、50mmの高さになるまで搗き固めていく。



今回は上写真の左から、三井の土のみ/石灰/石灰+セメント/黄さば土、と種類ごとに版築ブロックを試作。表層や風化の経過を観察する。



土のみのブロックは上層が雨などで土が流され、砂利が露わになっている。石灰を混ぜたものは比較的表層の削れや傷は見られないが、下層のほうが緑がかっているのがわかる。

身近な自然素材と建築

—フィールド調査より—

作品名	土着するくらしと循環のかたち 小屋 × 自然素材	作品番号	2/5
校名	富山大学 芸術文化学部		
氏名	杉田 茉優		

石川県輪島市三井町市ノ坂集落



広大な自然、多様な生き物に恵まれ、周囲は田んぼが広がる三井町の集落、市ノ坂。市ノ坂を歩いていると畑仕事をする人や食物や薬を干していたり、座り込んで近所の人と会話を楽しむような人たちが、さまざまなここでの暮らしが垣間見える。土壁がむき出しになった土蔵や母屋は手を動かしながら暮らしをつくってきた姿を思わせる。

現地調査からみる小屋とくらし



—市ノ坂の
さまざまな小屋たち—

市ノ坂は母屋と土蔵、小屋（当時は馬屋）がくらしの舞台となっていた。現地調査のなかで、母屋82棟に対して土蔵は28棟、小屋は136棟あることがわかった。現在では使われていない小屋も多いが、そのかたちはさまざまで持ち主がその場にある材料をあり合わせてつくったであろうかたちが面白い。錆びたトタンや漆喰がはがれた土壁、風化による仕上げが魅力的である。また、その時間の層は、これらの小屋がこの地に長く根付いていることを感じさせる。



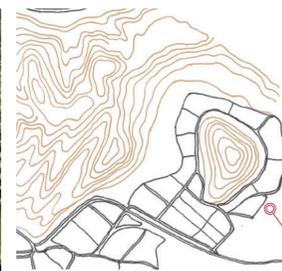
市ノ坂のくらしを訊く



—市ノ坂でくらすみなさん—

集落のかたへのヒアリングでは、市ノ坂のくらしと自然素材の関係性について尋ねた。現状、くらしと自然素材の結びつきは希薄になりつつある。茅葺屋根はほとんどが瓦にかわり、雪囲いにも茅束が使われていたが現在はトタンが使われるようになった。竹を伐採する機会も減少したために、山の竹がうっそうと生え、民家に迫ってきているという問題点も見つかった。しかしお話を伺うなかで、昔茅葺きや左官をしていたという職人の方や、昔は竹を伐採して小舞をかき、土を採ってきて壁を塗っていたと話す方との出会いもあった。希薄になりながらも、地域の自然素材からくらしをつくる知恵や営みを知る人、茅葺や左官技術をもつ人たちがたくさんいることがわかった。

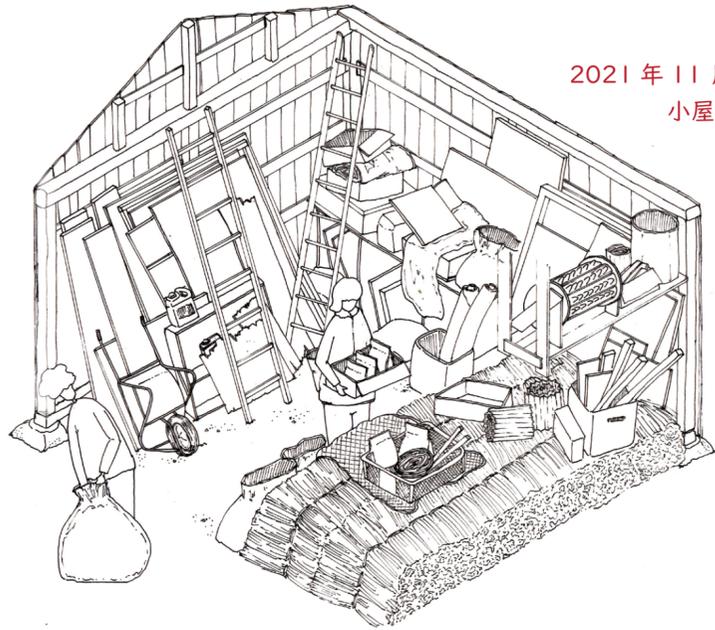
廃小屋の発見



現地調査で発見したまるやま裏の廃小屋。4.5年放置されていたこの小屋は周辺を草に覆われ、外からは姿が確認できない状態であった。

廃小屋の発見場所

小屋 × 自然素材から暮らしを考える 一 廃小屋修復の実践一



2021年11月
小屋の掃除と片付け

04-①
廃小屋の現状を調査



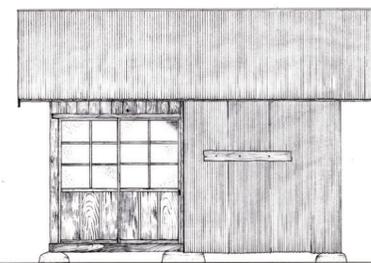
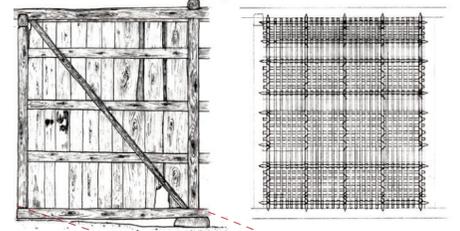
区長さんとおして持ち主の方に連絡、使用許可をいただき、小屋内を調査。農小屋として使われていたため、小屋のなかには田植え時に使う田植え定規や足踏み脱穀機などの農具、肥料や土が残る。大きく曲がった梁、寸法やかたちのきれいさにとらわれないつくりがおもしろい。
⇒この廃小屋を市ノ坂の自然素材をつかってなにかできないだろうか…

04-②
掃除と片付け、実測調査から図面におこす



現状調査から廃小屋を身近にある自然素材と自分たちの手で実際に修復してみようと考えた。そのための準備段階としてまずは小屋の掃除・片付けを実施した。小屋に残るものなかには古い建具や坪板に使っていたであろうトタン、マルチシートなど、改修時に再利用できそうなものも見つかった。また、草に覆われ入り口正面のみしか見えなかったため周囲の草刈りをおこなった。その後実測調査を実施。既存の状態を図面におこした。

作品名	土着する暮らしと循環のかたち 小屋 × 自然素材	作品番号	3/5
校名	富山大学 芸術文化学部		
氏名	杉田 茉優		



入り口からすぐ正面に見える壁を、市ノ坂で採れる自然素材から竹小舞土壁に修復することを計画する

04-③
みんなで壁に小舞をかく



間渡し竹を差し込む



小舞竹を編んでいく



当日は研究室のメンバーと市ノ坂の昔左官をしていたというタカさんにも参加してもらい、小舞かきWSを実施。間渡しの位置に穴を明け、竹(幅25mm程度)を差し込み、指2本分くらいの間隔で小舞竹(幅20mm程度)を編む。

04-④
小舞に荒土を塗る



荒土づくり

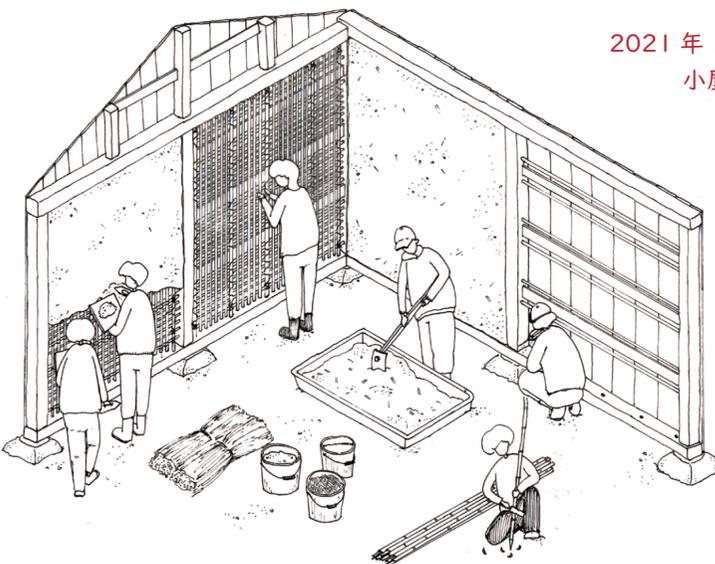


土と藁、水の配合は左官職人だったタカさんの感覚に任せ練っていく。

鏝をつけて塗っていく



できた荒土を研究室のみんなで塗っていく。鏝の使い方に慣れず苦戦しながらも、それぞれが手を動かしながら土を塗る感覚をつかんでいく。

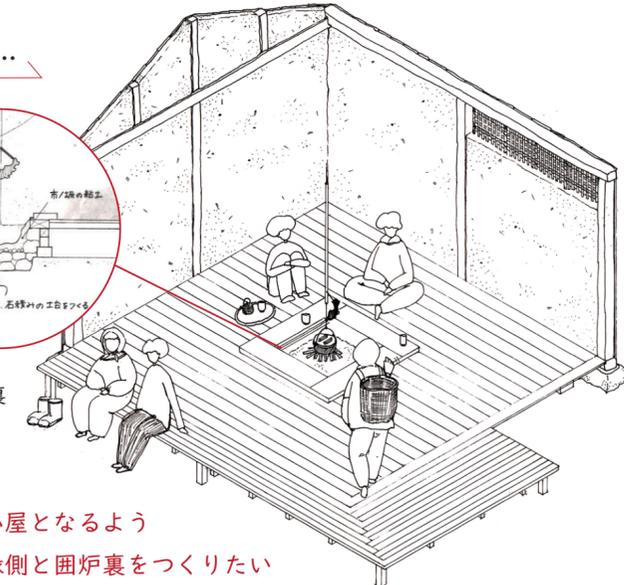


2021年12月
小屋の壁を土壁に修復



市ノ坂のタカさん

今後は…



市ノ坂の粘土でつくる
石積みの囲炉裏

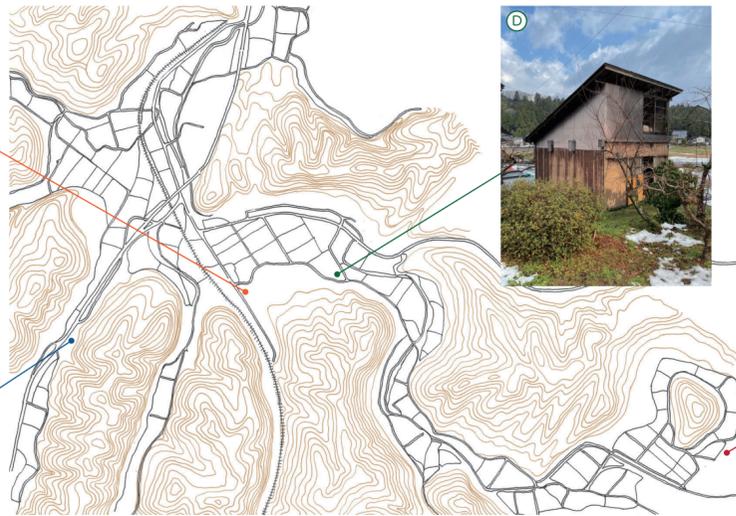
気軽に寄れて、心地よい小屋となるよう
縁側と囲炉裏をつくりたい

市ノ坂の空き小屋を里山の新たな“暮らしの拠点”へ

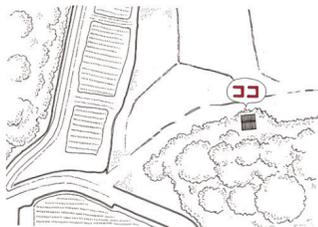
これまでの研究・調査、実践とおし身近な自然素材が建築へつながっていくことを身をもって経験することができた。本設計では、地域の自然素材で空き小屋の改修・修復をおこない、“手を動かしてつくる”暮らしを再構築する。小屋は市ノ坂の「暮らしの拠点」として、里山の新たな暮らしの一部となるような場を提案する。わたしたちがひとつの小屋を改修することがはじまりとなり、その活動が少しずつ集落の人からわたしたちに、そしてまた新たな世代とたくさんの人を巻き込みながら広がっていくことを期待する。

05-①

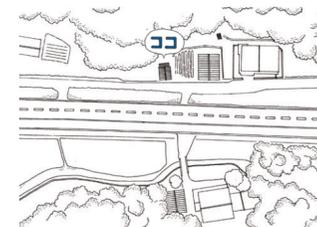
廃小屋を含む4つの小屋を舞台に



Ⓐ まるやま裏の廃小屋



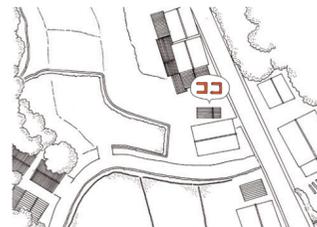
Ⓑ タカさんの新小屋



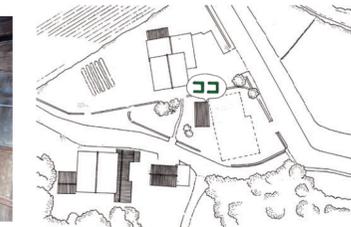
作品名	土着する暮らしと循環のかたち	作品番号	4/5
	小屋 × 自然素材		
校名	富山大学 芸術文化学部		
氏名	杉田 茉優		



Ⓒ ヒバタさんの農小屋



Ⓓ ヒガシさんの片流れの小屋



05-②

時間をかけながら小屋を“暮らしの拠点に”

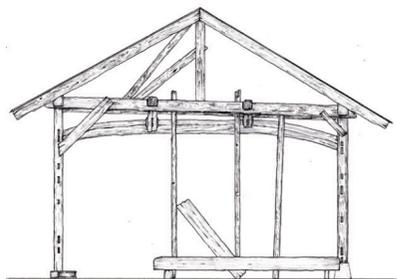
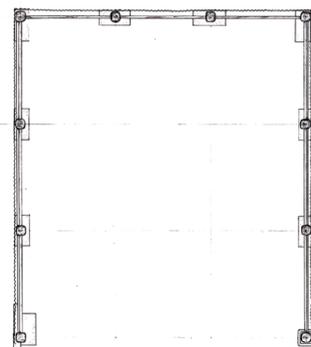
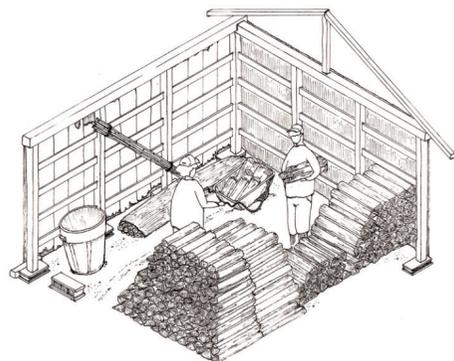
2023年 Ⓑ 改修スタート

掃除と片付け

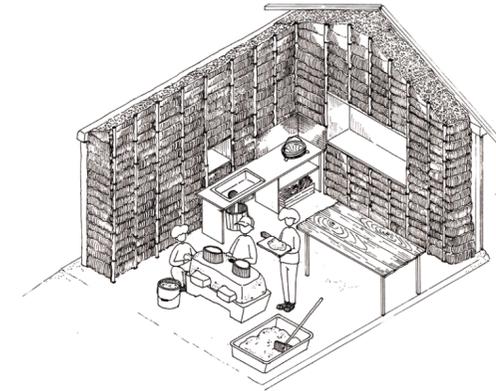
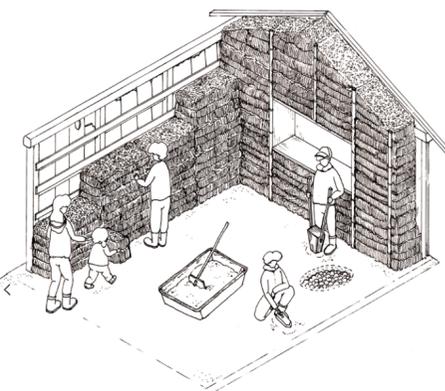
実測調査、図面におこす

市ノ坂の稲わらで壁をつくる

入り口にみんなでかまどをつくる



稲わらを圧縮させながら積んでいく



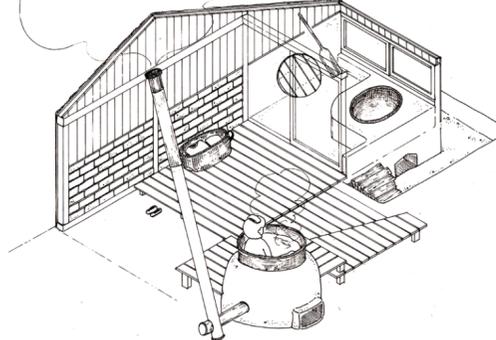
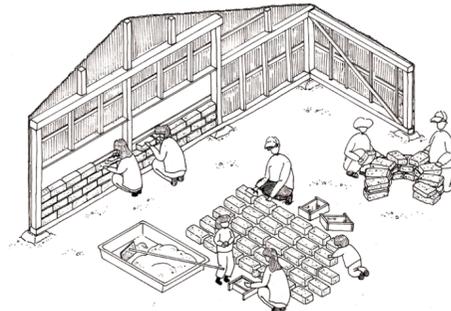
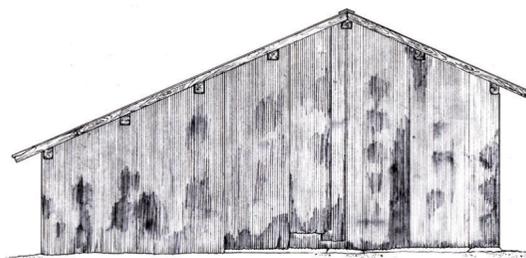
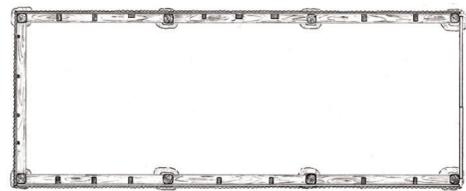
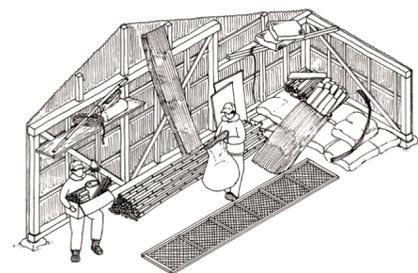
2025年 Ⓒ 改修スタート

掃除と片付け

実測調査、図面におこす

日干し煉瓦をつくる、積み

日干し煉瓦のかまどで五右衛門風呂を

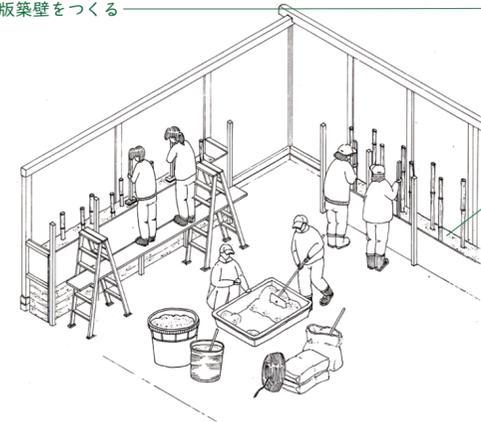
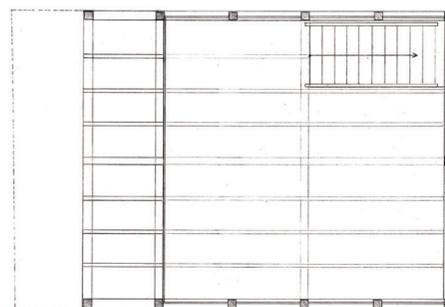
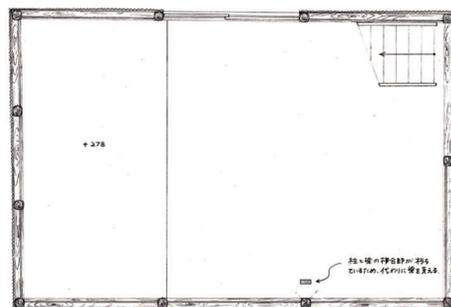
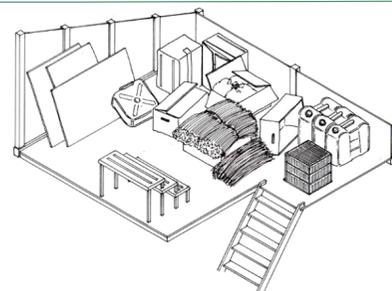


2027年 Ⓓ 改修スタート

掃除と片付け

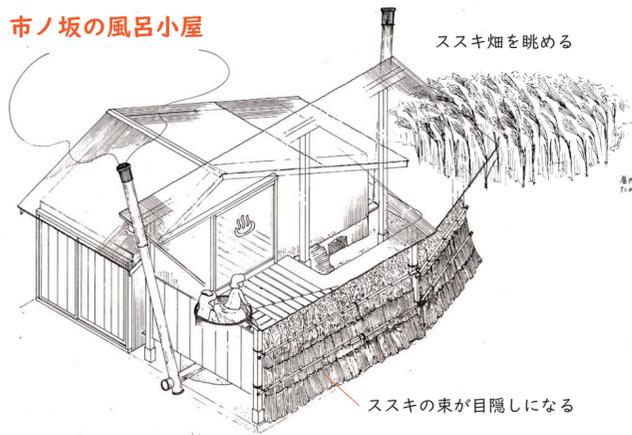
実測調査、図面におこす

版築壁をつくる

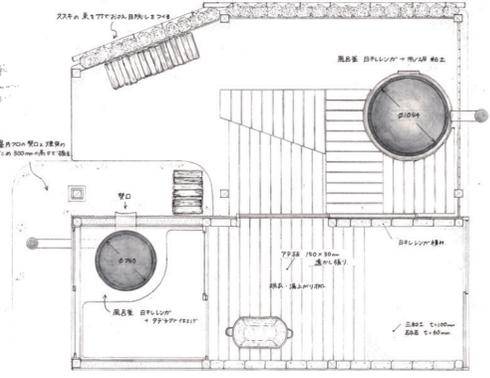


市ノ坂の赤土と石灰の版築

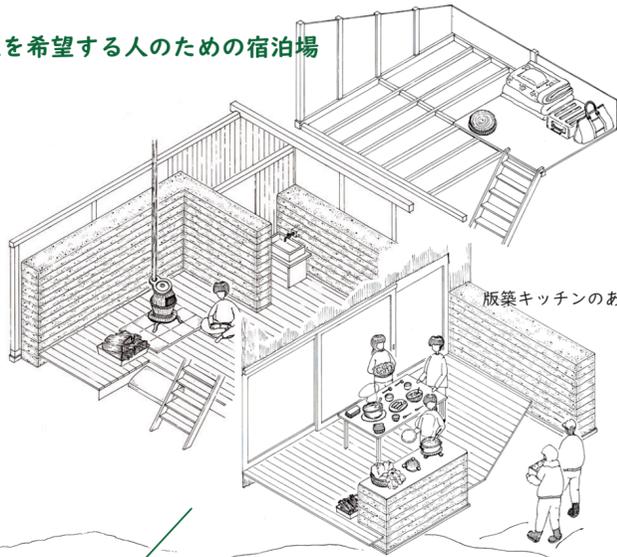
市ノ坂の風呂小屋



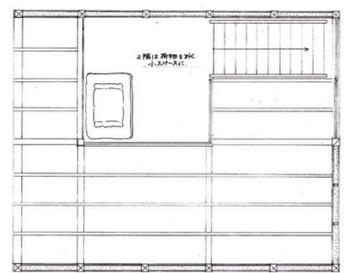
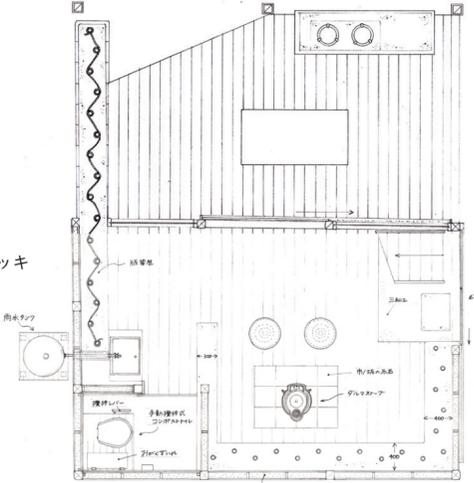
ススキ畑を眺める



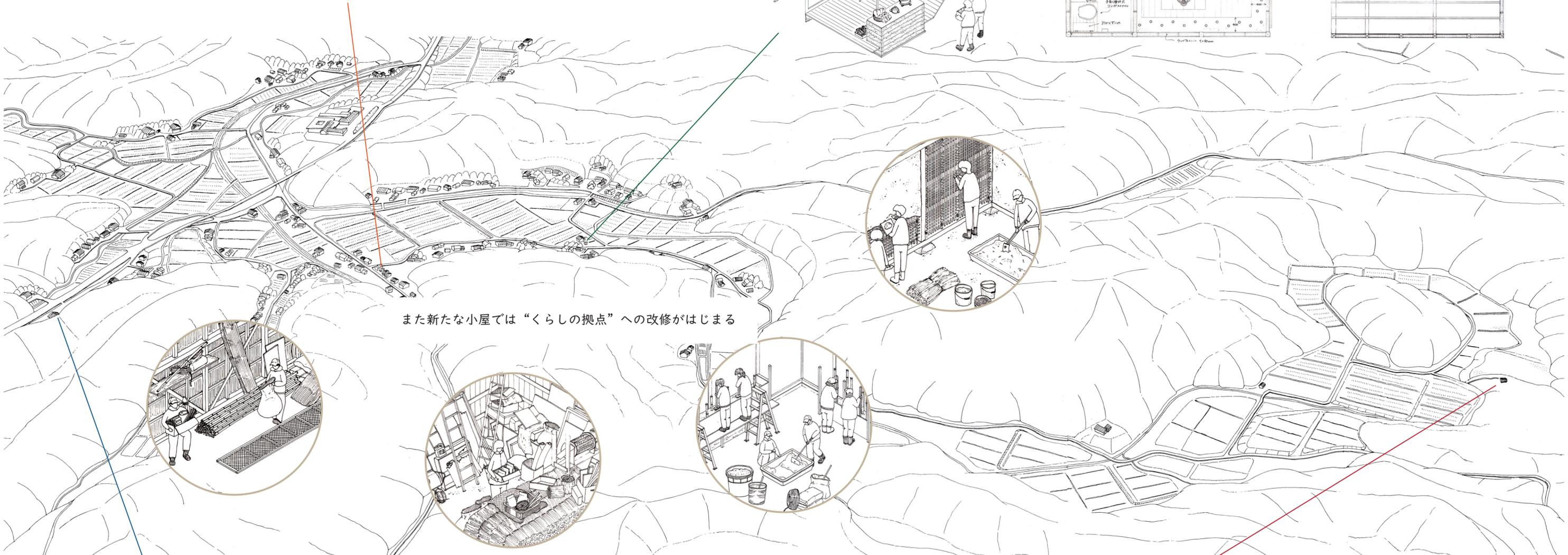
移住を希望する人のための宿泊場



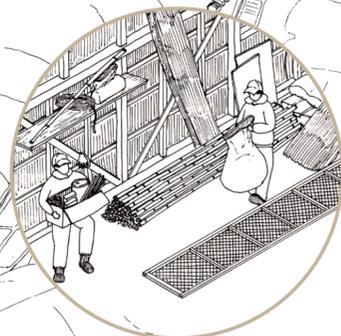
版築キッチンのあるデッキ



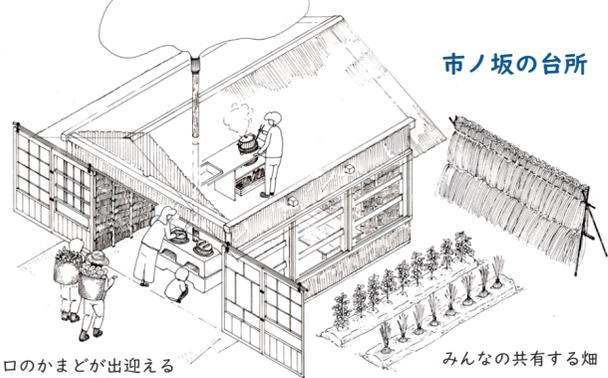
作品名	土着するくらしと循環のかたち 小屋 × 自然素材	作品番号	5/5
校名	富山大学 芸術文化学部		
氏名	杉田 茉優		



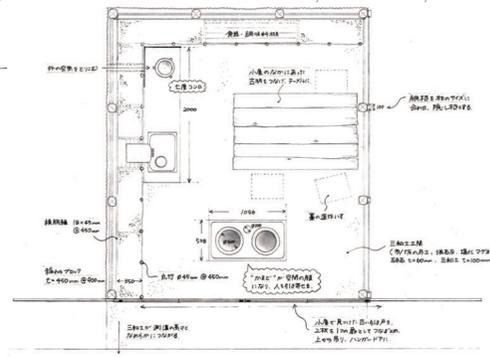
また新たな小屋では“くらしの拠点”への改修がはじまる



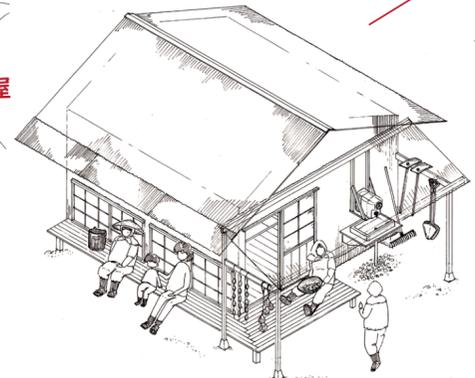
市ノ坂の台所



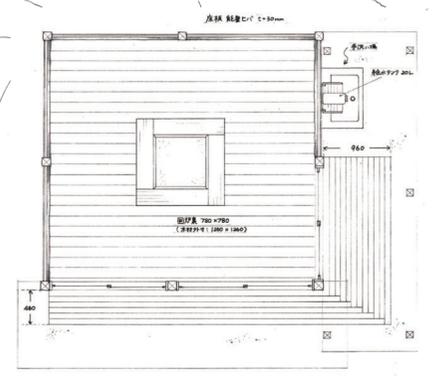
みんなの共有する畑



市ノ坂の休憩小屋



農作業おわりやひと休みにふらっと立ち寄る



入り口のかまどが出迎える